

アイヌの歌人・違星北斗の生涯と
その思想の変化について

違星北斗研究会 山科清春

2015年6月12日

はじめに

1 違星北斗とは

違星北斗とは？

違星北斗の著作

違星北斗の短歌

参照：配布資料 「違星北斗遺稿集 (S29、違星北斗の会)」



はじめに

「悪用」される北斗の言葉

俺はただアイヌであると自覚して
正しき道をふめばよいのだ

アイヌと云ふ新しくよい概念を
内地の人に与へたく思ふ

「アイヌ」という言葉の意味を本来の「良い意味」に戻したい。「アイヌ」を恥じるのではなく、自分たちが誇りある「アイヌ」となるのだ。

そのためにはアイヌ自身が立派な人間にならねばならない。

「違星北斗はアイヌだ、アイヌが減びてなるものか、はここに居る」と叫んだ違星北斗。

ところが、最近ネット上では
違星北斗の言葉が本来の彼の心と正反対の意味で「悪用」されている。



はじめに

「悪用」される北斗の言葉

はしたないアイヌだけれど日の本に
生れ合せた幸福を知る

「吾々は同化して行くことが大切の中の
最も大切なものであると存じます」

ネットの上でアイヌ民族へのヘイト発言をする者は北斗のこういった発言を切り取り「アイヌは和人に同化したがつていた！ 違星北斗のこの言葉がその証拠だ！」といった形で利用する。

素朴な疑問。アイヌの自覚と団結を叫んだ違星北斗が、なぜ、そのような発言をしたのだろうか？

それを考えてみるためには.....



違星北斗の生涯とその思想の変化

違星北斗の生涯

違星北斗の27年の短い生涯をいくつかの時期に分けて振り返ってみます。

1 幼少年期 0-12歳	楽園としての違星家、余市コタンから、苦難の小学校時代
2 青年期 12-23歳	漁場での生活、病気と「反逆思想」 思想の転機 恩師と修養
3 東京時代 23-24歳	夢のような東京生活 知里幸恵との「出会い」 勉強の日々 同族への想い
4 幌別・平取 24/25歳	大望を抱いてアイヌの聖地へ ままならぬ日々 同族の冷たい目 トラブル 疲弊
5 余市時代 25/25歳	「我がコタン」へ 研究の日々 「コタン」発刊 短歌雑誌で注目を集める
6 行商期 25-26歳	コタン巡察 ネットワーク作り アイヌ一貫同志会 フゴッペ遺跡の研究
7 闘病期 26-27歳	闘病日記 草人(古田謙二)の描写
8 死後	追悼 「コタン」発刊 違星北斗の会

違星北斗の生涯とその思想の変化

1 幼少年期

違星北斗は1901年12月末、余市大川町の余市コタンに生まれる。戸籍上は1902年1月1日生まれ。北斗自身は1901年で歳を数えていた。

戸籍上の名前は滝次郎だが、本来は「竹次郎」。代書人に口頭で伝えたため、「滝次郎」になってしまったという。

祖父・万次郎、父・甚作、母・ハルの元で、愛を受けて育った。兄弟は兄に梅太郎、ほかにも兄弟姉妹がいるがほとんどが早世している。

- 祖父・万次郎は「東京留学」の経験があり、後に道庁に雇われる。孫たちによく東京の思い出を話した。
- 父・甚作は熊取りの名人として知られる「アイヌらしいアイヌ」。
- 母・ハルは教育熱心な母親で、北斗をアイヌ子弟の行く旧土人学校（4年制）ではなく、普通の小学校（6年制）に入れた。

北斗は温かい家族に見守られて育ったが、小学校に入ったとたん、同級生から過酷な差別を受ける。

違星北斗の生涯とその思想の変化

2 青年期

●12歳で漁場へ。出稼ぎ生活。

→学校時代では終わらず、社会における差別待遇に苦しむ。

●17歳で病気になる。

→思想方面に興味を持つ。勉強して立派な人にならねばと思う反面、勉強すればするほど、社会におけるアイヌの境遇に怒りが噴出。

●「北海タイムス」にアイヌを侮蔑する短歌が掲載され、憤慨する。

和人に対する敵愾心が募る。

●思想の転機

不意に和人の先生に優しい言葉をかけられ「和人憎し」の心が氷解。

同時に「何故、誇り高い言葉であった『アイヌ』という呼称を、自分たちは嫌がらなければならないのか。『アイヌ』という言葉に、本来の意味を取り戻すためには、自分が勉強・修養して、立派な人物になることだ」

●恩師・奈良先生の元で、「修養」に励む。

地元青年の「修養会」に出席。小学校の恩師・奈良直弥（のぶや）先生の影響の元、修養雑誌「自働道話」を購読。俳句を始める。余市コタン内の若者たちで「茶話笑楽会」を結成。機関紙・茶話誌を発行する。

遠星北斗の生涯とその思想の変化

3 東京時代（1）金田一と知里幸恵

●奈良先生を通じて、知己となった雑誌「自働道話」の編集人・西川光次郎（光二郎）が、知人の「東京府市場協会」の役員に「良い青年はいないか」と問われ、西川が北斗を推薦。北斗は東京で事務員として就職することになる。

●東京に着いた北斗は、アイヌ語研究者・金田一京助を訪ねる。

そこで、知里幸恵と、彼女が遺した「アイヌ神謡集」のことを聞き、感銘を受ける。金田一からバチラー八重子のことを聞く。

●北斗は金田一京助とともに、「第二回東京アイヌ学会」に出席。演説して喝采を受ける。その後も、学会に出席して、柳田国男、伊波普猷、中山太郎、今和次郎らの知遇を得る。

違星北斗の生涯とその思想の変化

3 東京時代（2）名士狂

北斗は東京で、思想・文芸方面でも「師」を求め続ける。学者や文化人を訪ね歩き、教えを乞うた。自らを「名士狂」だったと手紙に書き残している。

●当時、希望社運動を展開していた「後藤静香（ごとう・せいこう）」の元を尋ね、アイヌの現状を訴えた。後藤は、その後北斗の理解者となる。

●日蓮系の新興宗教・国柱会の講習会に参加。

●山中峯太郎、秋田雨雀ら文筆家や、出版関係者らとも交流を深める。また、盛んに句会に参加、句誌「にひはり」等との交流（投稿は以前から）。

違星北斗の生涯とその思想の変化

3 東京時代（3）学会、市民講座、講演会

学会	「東京アイヌ学会」「北方文明研究会」などに参加 『南島研究の現状』柳田国男
「市民講座」	『経済学』小林丑五郎 『哲学概論』北吟吉 『現代の世相』番正雄 『日本文化史』中村孝也 『仏教の根本』今津洪嶽
国柱会関連	『御製講演』 田中智学 『思想と生活』 田村益喜 『帝大教授 美濃部達吉について』 『大なる哉聖徳』山川伝之助 『御製』 巴学
「天長節奉祝講演会」	『日本人の宗教生活と生祠の信仰』 加藤玄智 『法国の冥合』本田日生 『我国体の特長』 井上哲次郎
「明治聖徳記念学会」	『大邦日本の理想』文学士 大川周明 『宗教的方面より見たる台湾の民族性』丸井圭次郎 『現代的神社』今岡信一良

●北斗は、仕事の後、市民講座に参加している。（違星北斗T14年ノート他、記録に残っているもののみ記載）

違星北斗の生涯とその思想の変化

3 東京時代（4） 北斗は右傾していたのか

哲学、経済学、日本の歴史、文化史、民俗学。

宗教団体の国柱会や、修養団体の希望社、自働道話社に出入りしたりもしている。

そして、「天長節奉祝講演会」で、大川周明などの国家論を学んでいる。

北斗は「右傾化していた」といえるだろうか？ 熱狂していたのか？

この時期の「違星北斗ノート」にはこんな言葉がある。

「祖先崇拜は大生命の自覚であったとしたら、
私しの祖先崇拜は大日本の天照大神より
アイヌのエカシの崇拜が重要ではないか。」

北斗のノートには、講義で学んだことともに、学んだことを、アイヌとしての自分たちがどう生かすべきか、といったことが冷静にメモされている。

北斗は学んだことが、アイヌのために活かせるのかどうか、役立てるにはどうすればいいのかを考えているように見える。当時、「滅び行く」と言われたアイヌを救うことができるのは何か、

「全てはアイヌのため」同族の地位向上のために勉強するのだという、一本の芯が北斗を貫いている。

遠星北斗の生涯とその思想の変化

4 幌別・平取時代

●大正15年7月、北斗は東京の安定した、差別から開放された生活を捨てて、北海道に戻り、アイヌの根本的研究をする決意をする。

●北斗はバチラー八重子を頼り、郷里の余市に戻らず、一路八重子のいる英国聖公会の幌別教会へ向かう。

北斗は、金田一京介からバチラー八重子の話を聞き、文通をしていた。

バチラー八重子の紹介を得て、アイヌ語とアイヌ文化を学ぶために、意気揚々と「アイヌの旧都」平取に入った。

● また、希望社の後藤静香の社会事業の1つに「アイヌ救済」があり、後藤は八重子の養父ジョン・バチラーを援助していた。北斗は、後藤の事業の実行者としての使命も帯びていた。

●平取に入った北斗は、バチラー幼稚園を手伝いながら、平取のコタンを回り、同族と対話するが、必ずしも歓迎はされず、なかなか理解してもらえなかった。

●北斗は、肉体労働をしながら、コタンを回る啓蒙活動を続けるが、次第に疲弊していく。

遠星北斗の生涯とその思想の変化

5 余市時代 北斗の再生期

●昭和2年2月兄・梅太郎の子どもが病死したため、余市に戻り、春までニシン漁を手伝う。

●春、病を得て病床に伏すが、1ヶ月で回復。

盛んに短歌や童話などの執筆活動を行い、幼なじみでいこの中里篤治(凸天)とともに、『茶話誌』に変わる同人誌『コタン』創刊号を発刊する。

(その中で「アイヌの姿」を発表。北斗の思想の真髄といわれている)。

●余市とその近隣の島泊、古平などの遺跡調査や聞き取り調査などのフィールドワークを行う。

※昭和2年は、夏頃に再び平取を訪れて、平取教会でバチラー八重子らと働いている。

●10月ごろより「小樽新聞」「新短歌時代」などの媒体で短歌を発表し始める。並木凡平ら、小樽歌壇の人々と親交を持つ。

違星北斗の生涯とその思想の変化

6 行商時代 ネットワークを作る

●昭和2年の年末より、売薬行商をしながら、道内のコタンを巡る。編笠に箕という姿で、ガッチャキ(痔)の薬を売りながら道内を視察した。

(吉田菊太郎、辺泥和郎とともに「アイヌ一貫同志会」という結社を作っていたといわれるが、詳細は不明)。

●1月は積丹半島から小樽、千歳、2月末には白老、幌別、3月ごろには日高、鷗川、浦川などを訪ねる。白老では森竹竹市、幌別では知里真志保と再会する。

●小樽新聞で「疑ふべきフゴツペの遺跡」を連載。余市で発見されたフゴツペ遺跡の壁画や石偶(現在の「フゴツペ洞窟」とは別物)について、アイヌの立場から論じたもので、フゴツペ遺跡の遺物はアイヌのものではない、と論じた。それに対して、遺跡小樽高商(現・小樽商科大学)の西田彰三と論争になる。

●小樽新聞に連日のように短歌が掲載される。歌誌「志づく」(札幌・霽詩社)で違星北斗特集。生前唯一のまとまった歌集。

違星北斗の生涯とその思想の変化

7 闘病時代

●昭和3年4月、北斗は喀血し、余市の自宅で療養。主治医の山岸礼三医師の治療を受ける。看病にはおばや妹があたった。

●病床からも新聞や雑誌に闘病の短歌を送りつづけた。また、寝込んでからも読書をよくしたという。

●手書き(墨書)の自選歌集「北斗帖」を病床でまとめる。(現在の「北斗帖」とは別)。

●病床でも日記を書いていたが、「違星北斗遺稿 コタン」に掲載されたもの以外は、残っていない。(古田謙二は闘病の日記は「ゆがんでいる」と評価している)。

●9月7日には、仙台放送(ラジオ)で北斗のことが紹介された。

●重篤になってからは、友人の小学校訓導・古田謙二(冬草)が手紙の代筆などを行っている。また、上山草人(古田謙二と思われる)が闘病中の北斗の姿を短歌で残している。

●昭和4年(1929)1月26日、午前9時死去。

違星北斗の生涯とその思想の変化

8 北斗死後

●北斗の死後、古田謙二が枕元のポストンバッグから遺稿を見つけ、遺稿集を編むことを思い立つ。

●昭和5(1930)年、希望社の後藤静香が、北斗の死を悼み、遺稿集「コタン」を発行。

●昭和29年(1954)、木呂子敏彦が「違星北斗の会」を結成し、北斗の顕彰と資料収集を行う。12Pの小冊子「違星北斗遺稿集」を発行。「違星北斗歌碑」の建設をよびかける(昭和43年除幕)。また、NHKのラジオドラマで違星北斗を取り上げるよう働きかける(昭和30年3月6日放送)。

●昭和59年(1984) 遺稿集「コタン」が草風館から復刊。(平成7年、増補版を刊行)

●平成20年(2008) 小林よしのりが「ゴーマニズム宣言」の中で違星北斗を登場させ、以後アイヌ民族へのヘイト発言に北斗の言葉が悪用されるようになる。

●平成24年～ 小樽文学館、沙流川歴史館などで違星北斗に関する企画展が開催される。

遠星北斗の生涯とその思想の変化

まとめ 北斗の思想の変化 1

(1) 少年期：差別待遇と和人日本嫌い→目覚め

北斗は、少年期に苛烈なイジメにあい、社会に出ても漁場や差別待遇を体験。猛烈に日本社会と和人社会を呪う。

和人の老教師の温かい言葉によって、目を開かれる。

(2) 青年期：立派な人間になり、「アイヌ」本来の意味を取り戻したい

「アイヌ」という呼ばれることを、なぜ自分が嫌がらなければならないのか。立派な人間を表す「アイヌ」という言葉に、本来の意味を取り戻したい。勉強、修養して、社会に役立てるような立派な人物になることだと考え、修養を始める。

遠星北斗の生涯とその思想の変化

まとめ 北斗の思想の変化 2

(3) 東京時代：幸恵との出会い、アイヌを救うためにできること

東京に行き、金田一京助を訪ね、そこで「知里幸恵」と「アイヌ神謡集」と出会い、衝撃を受ける。

東京から北海道、そして「アイヌ」を眺望することで、余市という狭い地域での自らの差別体験に結びついた「アイヌ」とは別の「アイヌ像」に会う。

知里幸恵が「神謡集」で描いた世界は、北斗の中で理想のアイヌの世界として刻み込まれ、北斗はそのイメージを生涯にわたって追い続け、知里幸恵のクエスチョンに対するアンサーを求め続けることになる。

「アイヌ差別」がない社会と出会う。哲学、歴史、民俗学、宗教、国家論など、なんでも貪欲に学び続けるが、それを「アイヌのためにどう活かせるか」という立場からのものであり、「実用的」な学問を求めているようにも見える。

違星北斗の生涯とその思想の変化

まとめ 北斗の思想の変化 3

(4) 東京で北斗は、差別からも解放され、市場協会の仕事でも、金田一から広がった学者・作家・知識人らとの交流でも、出入りしていた自働道話社や、希望社の人々たちにも、出会う人々に愛された。安定して、食うにも困らず勉学にも励める、夢のような日々を送っていたが、「自分1人の幸せではない、アイヌの未来のために活動しなければいけない」と思い始める。「アイヌ」のために生涯をささげる決意をする。

(5) 北海道に戻った北斗は、アイヌ語、アイヌ文化を学ぶとともに、アイヌコタンを巡り、自覚と団結を促し、同士を増やしていき、情熱的にアイヌのネットワーク作りを始める。

平取をはじめ、各地のコタンを巡り、情報交換ことで、自分の育った余市コタンとの差異や、共通点を知る。

(6) さらに、「言葉の力」を信じて、新聞や雑誌の短歌の投稿を続ける。和人にむけても問題提起していくことで、並木凡平のような理解者も現われた。

違星北斗の生涯とその思想の変化

まとめ 北斗の思想の変化 4

(7) 違星北斗の「同化」とは

違星北斗が「同化」という言葉を使う時、どういう意味で使っているのか。

「アイヌの一青年から」というテキストの中で、
北斗は「同化」することは大切だといった。

しかし、同時に、「アイヌであることから逃げ、和人の中に埋没してはいけない」「過去の事実を永遠に消し去ってはいけない」といったことも言っている。アイヌ民族の文化や言葉などを後世に残さなければならない。民族の誇りを持たなければならない、と言っている。

つまり、北斗が言った「同化」とは、日本国民として、和人と同等の立場を「アイヌ」という民族意識を持ったまま、確立すること。

民族としてのアイデンティティを遺したまま、アイヌが社会的に有益な民族集団となること。

それが北斗の言った「同化」と考えられる。